

其角堂永機の交友圏 — 細木香以を中心に —

越 後 敬 子

日本語コミュニケーション学科
非常勤講師

抄録

幕末の大通細木香以は、戯作者や狂歌師、俳諧師、商家の主人、幫間など多くの取巻連を引き連れて、花街に芝居にと派手な遊びにうつつを抜かした。俳諧師其角堂永機もその一人で、豪勢な遊びに随行し、金銭的な援助を受けてきた。香以を取り巻く人的ネットワークは、のちの永機に多大な影響を与え、「明治最後の大宗匠」と称されるほどの華やかな人脈を作り出したのである。

キーワード

俳諧、其角堂永機、細木香以、河竹黙阿弥、
金屋竺仙、『歌舞伎新報』、森鷗外「細木香以」、
仮名垣魯文「再来紀文廓花街」

はじめに

「明治最後の大宗匠」と称される其角堂永機は、華やかな人脈に囲まれていた。歌舞伎界では五代目尾上菊五郎と親密な間柄であり、実業界では三菱会社顧問となつて岩崎弥太郎を助けた小野桃齋に引き立てられ、当時の高級サロン「紅葉館」に出入りしていた。ほかにも旧大名を門人に持つなど、社会の上層部の人々とのつながりがあった。このような永機の交友圏は何によってもたらされたのだろうか。

幕末の大通細木香以は、江戸中期の豪商紀伊国屋文左衛門になぞらえて「今紀文」と称された。香以には戯作者や狂言作者、商家の主人、幫間など多くの取巻連があり、これらの人々を引き連れて花街に芝居にと派手な遊びにうつつを抜かした。永機はそれら取巻の一人であった。香以とその取巻についての関係は、これまで諸書に個別に述べられてきた。たとえば河竹繁俊氏著『黙阿弥全集 首

『巻』⁽¹⁾には河竹黙阿弥と香以との関係が、野崎左文氏著『私の見た明治文壇』⁽²⁾には香以と仮名垣魯文、香以とその他文人との関係が、といった具合にである。永機の交友圏を明らかにするためには、上記に加え、諸資料から香以の取巻連の全体像をつかみ、その上で香以と永機、香以の取巻連と永機との関わりを考察する必要がある。筆者は現在、魯文「再来紀文廓花街」、森陽外「細木香以」、金屋竺仙『恩』その他の資料により、永機を取り巻く人々について調査を続けている。本稿では「再来紀文廓花街」と「細木香以」を取り上げ、永機と香以との関わり的一端を探ることにしたい。

一 仮名垣魯文「再来紀文廓花街」

文政五年（一八二二）、香以は津国屋藤次郎こと細木龍池の長男として生まれた。津国屋は山城河岸⁽³⁾に店を構える酒屋で富豪であった。香以の履歴を最初に世に紹介したのは、魯文「再来紀文廓花街」である。これは『歌舞伎新報』第百十六号（明治十三年十二月二十三日発行）から第百四十二号（同十四年四月二十三日発行）までの計十七回にわたって連載されたもので、香以の祖父伊兵衛に始まって、父藤次郎、そして香以の三代にわたる津国屋主人の物語である。連載に先立ち、同誌第百十五号（同十三年十二月十七日発行）において、金屋竺仙が次のように「序言」を述べている。以下「再来紀文廓花街」引用文の句読点は私に付す。

三十余年のむかし、今の新橋竹川町に高慢臭き三人の

丁稚有けり。一人は僕の朋輩にて堺屋といふ質舗の年季小僧、前髪立の頃よりして筆跡を能し俳諧の句に妙あり。後年田川鳳朗の門に入、笠庵鳥吟即ち是也。僕も下手の横好、質物出入の帳面に董其章を拵くりて悪筆唐様に似た山俳諧点取発句に身をいれしが、自己の拙を覚りてふつゝりと念を断背担商業の糶呉服も異変者が看板の名代となりし珍筵凜。今一人は町内の鳥羽絵小僧と紳名のありし兼吉どんの実のなる果は現在の猫々道人。今年元地へ帰り花、むかし芽生の竹川町に再び根越の枝葉をひろげ、いろはに句ふ京文社長。そもく此三人の丁稚脱りは俱に近傍山城河岸なる香以居士の愛顧を蒙り、俳諧狂歌狂文の批点を受し師視まつ毛、遊戯の伝授風雅のまとる席に陪せし縁因も深く、居士が事蹟も概略知れど、鳥吟は世に先立、僕は一文不通、頼むは仮名垣猫々子。ぬしの忘れたところぐは斯であつたと臆気に傍より助言の岡視八目。始終まとまる居士が小伝劇場に渉る事実は、故人が老兄と仰ぎたる河竹翁に問合せ、糶売ならぬ取次も聊か報恩謝徳の為、話を絵にかく芳幾大人も居士とは知己の遁れぬ組合、なほ当時の生残り素蕩夫連にも問合せ、精々娯報知申すべく候

御ぞんじの 金屋竺仙敬白

新橋竹川町の商家に勤める三人の丁稚がいた。一人は堺屋という質商の丁稚で、若い時分から書をよくし俳諧に抜きんでいた。こ

の人は後に天保三大家と呼ばれた俳諧師の一人である自然堂鳳朗門に入り、笠庵鳥吟と称したという。鳥吟が堺屋の丁稚あがりとする事については、次号において「誤聞」と訂正されている。鳥吟は『新選俳諧年表』⁴⁾によれば通称本屋幸七、嘉永五年(一八五二)に『俳家古今墨蹟集』、安政二年(一八五五)に『古今墨蹟後集』を刊行している。鳥吟の名は幕末の俳書に散見するが、詳細については未調査である。

二人目は同じく堺屋の丁稚で、書や俳諧に手を染めたものの自己の才能を悟って断念し、呉服の行商となったという。これがすなわち「序言」筆者の金屋竺仙である。竺仙は文政六年、木挽町の金物屋橋本喜七の長男として生まれ、はじめ竹川町の質屋に奉公し、後に姉の婚家小倉屋高木佐平方で働き、嘉永六年、浅草に金屋呉服店を開業した。竺仙は明治三十三年(一九〇〇)に自ら喜寿賀集『恩』⁵⁾を発行し、かつての恩人たちへの報恩の念を述べる際、恩人の筆頭として香以の名を挙げてゐる。竺仙と永機との交友も非常に重要なものであるが、今回は紙幅の都合により、稿を改めて述べる予定である。⁶⁾

今一人はかつて「鳥羽絵小僧」とあだ名された兼吉という丁稚で、現在の猫々道人、つまり仮名垣魯文である。若き香以は父から遊蕩を諫められ、継母の実家三村氏の営む「鳥羽屋」に一時預けられるが、そこで丁稚として奉公していたのが後の魯文だったのである。魯文は文政十二年生まれ、明治八年に横浜で興した『仮名読新聞』

を離れ、「再来紀文廓花街」執筆当時は両国の京文社より発行された『いろは新聞』の主筆になった頃であった。

この三人の丁稚は香以から俳諧や狂歌を習ったり、または遊びの席の供をするなどして愛されていた。香以の事跡を綴るにあたり鳥吟はすでにこの世になく、私(竺仙)は文字を知らぬゆえ、残る魯文を頼みとするのだが、芝居に関する事柄は香以が生前「老兄」と仰いでいた河竹黙阿弥に問い合わせ、挿絵はこれも香以をよく知る浮世絵師落合芳幾が筆を揮うことになった、というのである。黙阿弥は文化十三年(一八一六)生まれで香以より六歳の年長である。黙阿弥冒頭で述べたように、香以と黙阿弥との関係は『黙阿弥全集 首巻』に記されている。黙阿弥も香以の取巻の一人ではあったが、他の取巻と違って金銭物品のために阿諛追従することがなかったという。ゆえに香以は黙阿弥を顧問格として敬愛し、「老兄」と呼んで親しんだのである。芳幾は天保四年(一八三三)生まれ。『歌舞伎新報』の発行にも関わり、浮世絵のほか新聞の挿絵も描いた。「再来紀文廓花街」は、このように香以を取り巻く人々による香以報恩の物語である。

「再来紀文廓花街」本文中には、香以の取巻連や香以の鼻屑にした役者が度々登場する。今その場面から四箇所を選んで抜き出しつつ、香以の生涯を簡単に追っておきたい。

○第三回(『歌舞伎新報』第百十八号、明治十四年一月十二日発行)

折々本石町塩河岸なる書家松本董斎に書法を問ふを名とし

て、長谷川町の梅屋鶴寿に狂歌の当座あるを托け、当家の丁稚兼吉（後に仮名垣魯文）を伴に從へ、其処に趣く帰途には丁稚をひとり先に歸し、力士の勢藤吾、俳諧師の牧乙芽（後の冬映）、刀屋三次その他を誘ひ、遊興の殺風景、幫間腕を捻擧、茶丁の首筋捕へ、灣泊遊びの駄々乱大尽。

香以は十七の頃から家に入りの誰彼を引き連れ、料理屋・船宿・妓楼などに遊んだ。そのための負債が父藤次郎に知られ、天保十二年、二十歳の時継母の実家三村氏の鳥羽屋に預けられた。しかし言いつけ通りにじつと謹慎してられる香以ではない。鳥羽屋丁稚の兼吉（魯文）を伴に、書や狂歌を習うことを口実に店を出て、力士の勢藤吾や俳諧師冬映ら取巻を引き連れて遊里へ繰り出すのであった。

○第五回『同』第百二十一号、同年一月二十七日発行

其の頃毎日入びたりしは、狂歌師梅屋鶴寿（長谷川町待合茶亭室田又兵衛）、石橋真国（茶屋七兵衛）、俳諧師善哉庵永機（今其角堂）、同牧冬映、同鶴歩庵守一（野村新蔵）、戯作者柳下亭種員、狂言作者河竹新七（前名柴晋助）、男芸者は桜川善孝、荻江千代作、都千国（初号荻江露助後に千中、玄治店に住）、菅野のん子等にて、又小倉のお猿（谷中団子坂住）、質店の隠居大津屋古朴（船宿の隠居）、外科医師石川甫淳（俳号雁伍）、幫間医竹内も偶々来り、百島勾当に一中節を稽古せり。此より前宇治紫文（千種庵）父子（男福後

に二代目紫文、渾号油陶器）も狂歌声曲の事に托し（実は取巻）古人津藤在世の折は屢に来訪せしが、狂歌の庵号嗣名の事にて紫文不快の念あるよりしばらくは中絶せしが、此頃は又訪来りて香以が投患を仰ぎしとぞ。

右の引用中「小倉のお猿（谷中団子坂住）、質店の隠居大津屋古朴（船宿の隠居）」とある部分は、次号で「小倉のお猿（谷中団子坂質店の隠居）、大津屋古朴（船宿の隠居）」と訂正されている。安政三年、父藤次郎の死後家督を継いだ香以は、喪の明けるのも待ちきれずに遊興にふけり、新吉原江戸町の玉屋山三郎抱えの遊女若紫を身請けし、これと折り合いの悪かった本妻を実家に帰してしまつた。この頃山城河岸の店には多くの取巻連が入り浸っていたが、その中には狂歌師梅屋鶴寿、江戸町奉行付腰掛茶屋主人で国学者の石橋真国、俳諧師其角堂永機、戯作者柳下亭種員、狂言作者河竹新七（黙阿弥）ら文人のほかに、幫間、商家の主、医師等がいた。

○第六回『同』第百二十二号、同年二月二日発行

香以散人花街に倦て猿若町の劇場に替り日毎に演戯を見る日、是より前愛顧の情ひ一途に帰す。河原崎権十郎（今の團洲）を始めとし、市川小団次（米升）、相中は中村鴻蔵、市川米五郎、松本國五郎（今の市川猿十郎実父）、後に今の九蔵をも其都度招き、金銀は当座懐中囊に貯へ限り身に纏ふ持物まで意に委して分ち与へ、見物毎には表方楽屋までも潤はし、殊に権十郎を最良の余り荒磯連といへるを組立、見物講の筈を開き、その

掟書作りし事あり。演文は勝田諸持（二閑齋、後に紫文）。時に権十郎が実父寿海老人白猿八代目団十郎が変死の後、再び江戸に帰り来しを旧愛といひ、其実子権十郎を深く愛せば、更に白猿をも鼻眞にして、此父子に投恵し物幾干といふ価を知らず。実に権十郎が河原崎の養家を離れ、現今九代目団十郎と独歩の伎倆を輝かし、俳優社会の親玉と世の喝采を蒙る基ゝは、躬ら保つ技芸にある共、その始め香以居士が愛顧の厚きに依てなり。

花街での遊びに飽きた香以は、今度は芝居にのめり込んだ。多くの役者、または裏方にまで目を掛けて惜しみなく金品を与えた。中でも特に八代目団十郎自刃の後は九代目団十郎を鼻眞にし、「荒磯連」と名付けた鼻眞連まで組織した。

「再来紀文廓花街」中にはほかに多くの取巻連や鼻眞にした役者名が挙げられている。香以は取巻連たちを、時に山城河岸の本宅に招き、時に花街や芝居に引き連れて豪遊した。しかしこのような遊蕩はいつまでも続くものではない。やがて財力が底を突くと店を親戚に譲って隠居し、文久二年（一八六二）には浅草馬道の猿寺境内、続く三年には下総寒川への移転を余儀なくされる。その後幕末には江戸に戻って妹婿のもとに居候していたが、明治三年九月十日、四十九年の生涯を閉じたのであった。

○第十六回（『同』第四百二十一号、同年四月二十日発行）
其翌年の一周忌には親戚の参詣供養を憚りて時を延十月十日

とかや。故人が生前の愛顧を受し河竹新七、金屋竺仙、狩野晏川、春富士紫玉、桜川（故）善考、其角堂永機杯、谷中の小倉是阿弥が家に打集りて香以居士が小祥忌の仏事を行ひ、夫より願行寺に参詣なし、各自靈位を拝せし折、其角堂が手向の句に

此墓にむかし小判の落葉かな 其角堂永機

翌明治四年の一周忌からひと月遅れの十月十日、狂言作者河竹新七（黙阿弥）、呉服商金屋竺仙、画家狩野晏川、其角堂永機ら、かつての取巻たちが谷中団子坂の小倉是阿弥宅に集い、その後駒込の願行寺に詣でて香以の供養を行った。団子坂の小倉是阿弥とは第五回にも登場した「小倉のお猿」のことである。

二 森鴎外「細木香以」

魯文の「再来紀文廓花街」に続き、森鴎外は大正六年に「細木香以」を著して香以の事跡を綴った。執筆の契機は「団子坂の小倉是阿弥宅」にあった。「細木香以」から引用する。

それから或時香以と云ふ名が、わたくしの記憶に常住することとなつた。それは今住んでゐる団子坂の家に入った時からの事である。此家は香以に縁故のある家で、それを見出したのは當時存命してゐたわたくしの父である。父は千住で医業をしてゐたが、それを廃めてわたくしと同居しようとおもつた。そして日々家を捜して歩いた。その時此家は眺望の好い家として父

の目に止まった。(中略)父はわたくしの同意を得てから、此家を買はうとして、家の持主の誰なるかを問ふことにした。団子坂の下に当時千樹園と云ふ植木屋があった。父は千樹園の主人を識しつてゐたので、比丘尼の家の事を問うた。千樹園はかう云つた。崖の上の小家は今住んでゐる媼おきなの所有である。媼は高木たかぎさんと云つて、小倉をくらと云ふものゝ身寄みよりである。小倉は本質屋もつとで、隠居してから香か以散人の取巻とまぎをしてゐたが、あの家で世を去つた。媼は多分あの家を売ることを惜まぬであらうと云つた。

鴎外が明治二十五年に転居し、のちに父母を見送ることになつた団子坂上の家が、「再来紀文廓花街」第十六回に見える香以の一周忌を行つた小倉是阿弥の家だつたのである。家の二階から品川沖が眺められたことから、鴎外はここを観潮楼と名付け、大正十一年に没するまで住み続けた。跡は現在文京区立本郷図書館鴎外記念室となつてゐる。

鴎外は本話執筆にあたり、「再来紀文廓花街」、根本吐芳の『大通人香以』、橋本素行(竺仙)の『恩』等を依拠資料としたと述べてゐる(「細木香以」第十二章)。しかし土井重義・山崎一穎・高寺康仁氏らの研究(9)によると、ほとんどを「再来紀文廓花街」に依つており、その他の資料は参看してゐなかつたらしい。今そのことは直接問題としないが、取巻に関する記述について見た場合、「再来紀文廓花街」では逸話ごとに随所に登場する取巻たちを、鴎外は簡潔に

まとめ記述してゐる。ここで長くなるが鴎外の「細木香以」にまとめられた香以の取巻、鼻貞にした連中に関するくだりを引用し、香以の取巻の全体を眺めておきたい。

劇場では香以は河原崎権十郎を鼻貞にした。後の九代目団十郎である。香以は鼻貞の連中を組織して、荒磯連あらいそれんと名なづ、其掟おきて文ぶんと云ふものを勝田諸持かつたもろもちに書かせた。九代目の他日の成功は半香以なつかはの庇蔭ひいんに因つたのである。又八代目が自刃した後、権十郎の実父七代目団十郎の寿海老人が江戸に還つてゐたので、香以はこれをも鼻貞にした。此父子の他、俳優にして香以の雨露うろに浴したものは、猶市川小団次、中村鴻藏こうざう、市川米五郎よねごろう、松本国五郎等がある。

香以の通つた妓楼は初め吉原江戸町一丁目玉屋山三郎方さんざうで、後角町稲本楼である。玉屋には濃紫のむらさき、稲本には二世小稲がゐた。引手茶屋は玉屋に通つた時、初め近江屋半四郎、後大坂屋忠兵衛、稲本に通つた時仲の町の鶴彦であつた。

香以が取巻は殆ど数へ尽されぬ程あつた。中にはこれを取巻に廁まじふるは或は酷に失するかも知れぬと思はれる人もある。しかし區別して論ずることも亦容易でない。

俳諧師には既に挙げた為山、永機とりのえとうきの外、鳥越等裁、原田梅年ばいねん、牧冬映、野村守一しゅいつがある。梅年は後六世雪中庵と称した。嵐雪あらしゆき、史登りとう、蓼太れうた、完来、対山、梅年と云ふ順序ださうである。守一、通称は新蔵、鶴歩庵と云つた。

狂歌師には勝田諸持と其子福太郎と、室田鶴寿、石橋真国がある。福太郎は綽号を油徳利と云った。後に一中節に於いて父の名を襲ぎ、二世紫文となった人である。鶴寿は梅屋と云った。通称は又兵衛、長谷川町の待合茶屋である。真国は通称七兵衛である。

狂言作者には河竹新七、次で瀬川如臯がある。新七は元の柴晋助である。

彫工には石黒某がある。画家には取巻に算すべからざる人もあるが、松本交山、狩野晏川、月岡芳年、柴田是真、鳥居清満、辻花雪、福島隣春、四方梅彦がある。備書家には宮城玄魚がある。

商人若くは商家の隠居には先づ小倉阿猿がある。団子坂の質屋の隠居で、後に是阿弥と云った。阿心庵是仏がある。谷中三河屋の主人である。大津屋古朴がある。船宿の隠居である。金屋仙之助の竺仙がある。竹川町の競呉服商である。

医師に石川甫淳がある。外科専門であった。俳諧の号を雁伍と云った。

落語家には乾坤坊良斎、五明楼玉輔、春風亭柳枝、入船米蔵がある。玉輔は馬生の後の名である。講談師には二代目文車、桃川燕国、松林伯田がある。燕国は後の如燕である。

専業の幫間で、当時山城河岸の家に出入してゐたものは、桜川善孝、荻江千代作、都千国、菅野のん子等である。千国は

初の名が荻江露助、後に千中と云ふ。玄治店に住んでゐた。又吉原に往つた時に呼ばれたものは都有中、同権平、同米八、清元千蔵、同仲助、桜川寿六、花柳鳴助等である。中にも有中は香以が其頓才を称して、常に傍に侍せしめた。

先に「再来紀文廓花街」の引用箇所に登場した人物のほかにも多数の名が挙がっているが、いずれも同話の内容を出るものではない。歌舞伎役者に俳諧師、狂歌師、狂言作者、彫工、画家、備書家、商人、医師、落語家、講談師、幫間と、当時の江戸における著名な文人や、芸能、芝居、花街に携わる者のほとんどといっても過言ではないかもしれない。

香以は幕末の激動の世相もどこ吹く風、財力にものを言わせて放埒三昧に日を過ごし、家業を顧みることなどなかつた。粹人を気取つて大勢の取巻を引き連れて花街や芝居に遊びまわり、やがては莫大な身代を潰してしまつた。取巻の多くは香以に媚びへつらい、少しでも多くの金品を与えられることを期待した。たろう。そしてこのような者たちは香以の没落とともに香以の周りから姿を消し、次のパトロン元へと移つていったようだ。しかし、一部の取巻たちは香以のネットワークを通じて結び付き、香以没後も関係を深めていたのである。

三 永機と香以

さて、香以の取巻連についての記述が長くなつたが、次に香以と

永機との関わりに焦点を当ててみたい。まずは勝峯晋風氏『明治俳諧史話』¹⁰中から、香以に関する箇所を引用する。

俳諧には初号鯉角、又李螻、梅の本、俵口子、破笛山人、梅堀、桃江園の諸号を持ち、遊行上人から許されて寿阿弥、後に梅阿弥と云った。可布庵門から出て、永機の深川座に入り、洒落な江戸座を好んで家没落、下総の寒川に閑居後も俳諧を以てその癖を散じつゝあつた。

「再来紀文廓花街」によれば、香以の父藤次郎は書に優れ、仙鳩と号して常に俳諧を嗜み、また狂歌を好んでいたという。香以もまた書や狂歌・俳諧・戯文に優れていたというが、父と父の元に入出入りする文人たちの影響によるものであろうか。初めに入門した可布庵逸淵は寛政二年（一七九〇）の生まれで碩布門。はじめ上野国高崎で開庵したがのち江戸に出て活動し、晩年には武蔵国本庄に隠栖して文久元年に七十二歳で没したという。香以は江戸在住の頃の逸淵に師事したのであろう。その後永機門に入るのであるが、香以と永機との関わりを具体的に知るためには、再び「再来紀文廓花街」を参照しなければならないであろう。本話中に永機は八回登場する。そのすべての場面を要約して次に記してみる。

○第五回（『歌舞伎新報』第百二十一号、明治十四年一月二十七日発行）

安政三年九月二十日、香以の父藤次郎が没した。その後家督を継いだ香以は、いよいよ誰の目も憚ることなく放埒に振る舞った。山

城河岸の店には多くの取巻連を招いて落語その他様々な催しを行っていたが、その中に永機も含まれていた。

○第七回（『同』第百二十三号、同年二月六日発行）

江戸中期の豪商紀伊国屋文左衛門には雅やかなところがあった。彼は俳諧をたしなみ号を千山といった。そして当時著名な文人墨客を愛し、中でも彫金師横谷宗眠、画家英一蝶、書家文山、俳諧師其角らと深く交わっていた。香以もまた多知多識で文筆の才能は旦那芸の域を超えており、その名は都下に知れ渡っていた。香以のもとには多くの雅人、俗人が出入りしていたが、紀文の宗眠に対して石黒某、一蝶に対して松本交山、また俳諧について語り合う宗匠に其角堂永機がいた。

○第九回（『同』第百二十五号、同年二月二十日発行）

安政四年、親戚の三村氏から円山応挙の鯉の絵一幅を贈られた。香以は歓喜の余り応挙の鯉三十六幅を集めようと、府下・京阪の書画屋・骨董屋を渉獵して買い求めたが、そのほとんどは贗物であった。それならば現存の上手に新たに書かせるのがよいだろうと、交山・是真・素真その他の画家に鯉の絵三十六枚を描かせた。同年十一月、これを記念して其角堂永機を宗匠に招いて「俳諧の連句鯉鱗行」を催し、香以は刷り物を作って知己に配布した。

○第十回（『同』第百二十七号、同年三月三日発行）

安政六年夏、香以は俳諧師の月の本為山・鳥越等裁・永機、その他竺仙や封間たちを引き連れて江ノ島・鎌倉・金沢見物に出かけた。

その帰路、藤沢の清浄光寺に参詣して遊行上人に拝謁し、阿弥号九つを授かった。遊行上人とは先に浅草の日輪寺にて出会い、その時にも阿弥号を受けていた。

○第十二回（『同』第百二十九号、同年三月十日発行）

香以は為山の号「梅の本」を無理言つて所望し、また永機に乞うて「晋」の一字を譲り受けた。

○第十三回（『同』第百三十二号、同年三月十八日発行）

文久二年、香以は山城河岸の本宅を親族に任せ、浅草馬道の猿寺境内に移り住んだ。しかしここでも負債に責められ、翌三年には下総寒川の白幡八幡前に閑居することになった。香以の無聊を慰めるため、黙阿弥、永機、竺仙はしばしば手紙を書き送り、江戸の景況や流行を知らせた。

○第十六回（『同』第百四十二号、同年四月二十日発行）

明治三年九月九日、香以は四十九年の生涯を閉じた。その翌年の一周忌、香以の親戚の参詣供養とは別に、かつての取巻たちが法要を行った。黙阿弥、竺仙、狩野晏川、春富士紫玉、桜川善孝、永機らは、谷中団子坂の小倉是阿弥宅に集まり仏事を行い、その後願行寺に参詣して香以の霊を弔った。その時永機は次の手向けの句を詠んだ。

此墓にむかし小判の落葉かな 其角堂永機

○第十七回（『同』第百四十二号、同年四月二十三日発行）

谷中三河屋の主人阿心庵是仏はひそかに香以の似顔を描いてある

人に与えた。その人が香以に絵の賛詞を乞うたところ、香以は快く一句を記した。

花に売る一本物や江戸松魚 香以

その後この絵は久しく永機が所持していたが、私（魯文）が香以の小伝を綴ると聞くと、永機は新たに杉の上箱を作り贈ってくれた。その箱蓋の裏面に句がある。

月雪の一本ものや江戸ざくら

贈仮名垣先生 其角堂寓居永機

筆者は先に其角堂永機の幕末維新期の動静^①について述べたが、それに右の香以との関わりを加えると次のようになるだろう。

永機が俳諧を始めた時期については今のところわからないが、嘉永元年の俳諧高点付句集『俳諧觸』嘉永再興本（七世沾山編、嘉永元年自序）にその名を見出すことが出来る。この年永機は二十六歳。父鼠肝とともに一世湖十の系譜につながる当時の深川座（其角座）点者七人のうちの一人であった。永機が初めて俳書を上梓したのはそれから五年後の三十歳の時、嘉永五年の奥書をもつ『樸口集 初編』である。翌年には二編も刊行された。これは永機が深川座点者として自派の歳旦帖を刊行したものである。本書二編には香以の序文が付されているが、刊行にあたって香以の経済的な後援があったことは勝峯氏が明らかにされており、この時すでに永機門となっていたと考えてよいだろう。

ところで、香以の初めの師逸淵が本庄に隠棲した年次は不明であ

る。安政二年の『俳家古今墨蹟』（笠庵鳥吟編）には香以を「可布庵門人」と紹介しているが、『樸口集』のことから考えると、実際には嘉永五年以前には逸淵の元を離れ永機に入門したものと思われる。香以が永機に入門した理由は逸淵が江戸を離れたこと以外にもあったであろう。当時の人々は香以を「今紀文」と称して江戸中期の豪商紀伊屋文左衛門と比較していた。「再来紀文廓花街」第七回にもあるように、本家紀文が英一蝶を愛したことを真似て香以は松本交山を愛した。また本家が其角と親交を深めたように自分も其角の系統にある深川座に身を置き、永機を庇護することで「今紀文」たることを望んだのである。

その後、安政三年の香以の父藤次郎の没後間もなく、永機はほかの大勢の取巻とともに山城河岸の店に出入りしていた。翌四年には香以の要請に応じて連句を興行し、さらに同六年には為山・等裁・竺仙らと香以の江ノ島行きに随伴するなど、俳諧の師弟という枠を越えて親密な交際を続けている。

財産を使い果たした香以は、浅草馬道の猿寺境内、やがては下総寒川への転居を余儀なくされる。それまで恩顧を蒙った取巻連のうち、没落した香以を訪れる者は少なかった。特に香以に愛された九代目市川団十郎などは、全く顔を見せなかつたという。そのような中で永機や黙阿弥・竺仙らは香以に受けた恩を忘れず、手紙を送ったり、時には寒川を訪問するなどして香以の無聊を慰めたという。香以と取巻たちとの関係は、そこに金銭や物品の贈与があるため、

パトロンとそれに媚びへつらい恩恵を被ろうとするご機嫌取り連中ということになる。そしてそれは特に都有中ら幫間の間に顕著であった。彼らは香以の喜びそうなことを言ってご機嫌をとっては金品を与えられることを期待していた。永機も山城河岸の香以本宅に出入りし、香以の旅行に同行し、他の取巻と同様にやはり金銭的な授受関係はあったのであろう。『樸口集』の出版にあたっては香以の後援があったということである。この出版に限らず、深川座の運営そのものにも香以の援助は及んだことであろう。しかし永機と香以とのつながりは、単なるパトロンと追従者ではなかつた。香以は永機への援助を行った代わりに、江戸座一門という肩書きを手に入れた。ちょうど永機に入門したと思われる頃から、俳書中に香以の句が散見する。入集俳書は永機関連に止まらず、他派の俳書や類題句集などにも及んでいる。最後に、管見の限りの香以の入集書を紹介する。¹²⁾

嘉永元年 『かり日記』（祇南齋南枝著） 発句一

嘉永五年 『樸口集 初編』（永機編） 発句一

嘉永六年 『樸口集 二編』（永機編） 永機・香以表六章一

発句一 跋文

『那加幾年志婦』（李卿編） 発句一

『俳諧百庵玉詠集』（過日庵祖郷編） 発句四

安政二年 『一翁四哲集』（惺庵西馬編） 発句一

『さとしぐれ』（五休編） 発句一

- 『俳家古今墨蹟』(笠庵鳥吟編) 発句一
 安政四年 『雪沙遠』(雪中庵鳳洲編) 発句一
 安政五年 『俳諧刈跡集』(暉湖・三四編) 発句一
 『俳諧五元一覽』(栢隱新甫編) 香以・西馬両吟歌仙一
 発句一
 『さきもり集』(守轍編) 発句一
 『当宇太集』(太撫編) 発句一
 『俳諧浅草名所一覽』(桂心居貞之編) 発句一
 『俳林良材集』(双雀庵氷壺編) 発句十四
 万延元年 『庚申集』(永機・梟水編) 発句一
 『とりかへ集』(大悲居葱玉編) 発句一
 『其夕集』(三森幹雄編) 西馬発句「名月の」百韻に
 一句出句 発句一
 『ひやく花しふ』(稔市編) 発句一
 『むつのゆかり』(一止・江三編) 発句一
 文久元年 『老のたのしみ』(寿徳庵仙也編) 発句一
 文久二年 『文久六百題』(双雀庵氷壺編) 発句四
 『雪こもり集』(水塊老人為山編) 発句一
 『文久新六百題』(菊守園見外編) 発句六
 文久三年 『研玉類題発句集』(三戒堂芳草編) 発句三十四
 『現存名家山海集』(半青居新甫等編) 発句八
 卷末人名録に記載あり

- 元治元年 『みとせ振』(楓川居其葉編) 発句一
 慶応元年 『たはこしふ』(枕流亭一澄編) 発句一
 慶応三年 『六庵集』(於曾此一編) 発句一

おわりに

幕末期に香以の庇護を受けたことは、永機を金銭的に助けたばかりでなく、明治以降「其角堂」を名乗って其角道統を宣伝し、「明治最後の大宗匠」と人々に称されるための人脈作りに大きく影響している。香以の取巻として花街に芝居にと遊び、通人たちとのつながりを持ったことで、永機自身も通人として磨かれていった。そして香以没後もその人脈を保つことで、俳諧師としては一目置かれる存在となり、大商人や歌舞伎俳優たちと華やかな交際をしていたのである。その一人として、かつて五代目尾上菊五郎との関わりについて述べたことがある¹³⁾。ほかに、「再来紀文廓花街」の「序言」執筆者であり、また『恩』を編纂した金屋竺仙との関係も極めて重要である。いずれ稿を改めて述べる予定である⁶⁾。

注

- (1) 河竹繁俊氏著『黙阿弥全集 首巻』(春陽堂、大正14)
 (2) 野崎左文氏著、青木稔弥・佐々木亨・山本和明氏校訂『増補私
 の見た明治文壇』(東洋文庫 759・760、平凡社、平成19)
 (3) 嘉永三年の近江屋板切絵図「日本橋南芝口橋迄八丁堀壺岸島築地

辺絵図」(市古夏生・鈴木健一氏編『江戸切絵図集 新訂江戸名所図会別巻一』筑摩書房、平成9)には、山下御門と幸橋御門間の外堀に面した岸に、「此川岸ヲ俗ニ山城河岸ト云」と記されている。現在の東京都中央区銀座六・七丁目の、外堀通とJR線高架に挟まれたあたりと思われる。

(4) 平村鳳二・大西一外氏著『新選俳諧年表』(書画珍本雑誌社、大正12)

(5) 『恩』についての研究に、伊藤一郎・早乙女牧人・堀敬雅氏「橋本素行(竺仙)編『恩』翻刻(一) および解題」(古典文学注釈と批評)第2号、平成17・12)、伊藤一郎・早乙女牧人・北島瑞穂氏「橋本素行(竺仙)編『恩』翻刻(二)」(『同』第3号、平成19・3)、橋本謙一・伊藤一郎・早乙女牧人氏「竺仙曼荼羅―五代目金屋竺仙橋本謙一氏の語る江戸通人の世界―」(『同』第4号、平成21・3)がある。なお、竺仙の五代目子孫である橋本謙一氏は、現在東京都墨田区本所にて呉服業を営んでおられる。

(6) 拙稿「其角堂永機の交友圏―金屋竺仙『恩』を中心に―」(『歌子』第20号、平成24・3 発行予定)

(7) 森潤三郎「校勘記」には、「根引して家に入れたのは若紫であり、それに駿河屋の鶴を囲ひ物としたために、本妻籠(遠州屋太右衛門女)は三人の子供を連れて里方へ還つたのださうである」と記している。

(8) 森鷗外「細木香以」の引用は、『鷗外歴史文学全集 第四巻』(岩波書店、平成13)によった。

(9) 森鷗外「細木香以」に関して、以下の論文を参照した。
土井重義氏「細木香以」拾遺」(『国語と国文学』第23巻7号、昭和21・7)

山崎一穎氏「細木香以」覚書」(『森鷗外 史伝小説研究』桜楓社、昭和57、初出は「本の本」昭和51・11)

柴口順一氏「五つの短かい作品―鷗外のいわゆる史伝について―」(『国語国文学研究』第84号、平成元・12)

高寺康仁氏「森鷗外「細木香以」再考」(『国文学言語と文芸』第120号、平成15・10)

(10) 勝峯晋風氏『明治俳諧史話』(大誠堂、昭和9)

(11) 拙稿「其角堂永機の俳諧活動―幕末維新期編―」(『実践国文学』第73号、平成20・3)

(12) 細木香以の発句については、早乙女牧人・堀敬雅氏が「細木香以発句集」(『古典文学注釈と批評』第2号・第3号、平成17・12、平成19・3)を発表している。氏らの調査は「再来紀文廊花街『恩』その他によるもので、今ここで初出俳書名を掲出することも意義なしとはしないであろう。

(13) 拙稿「其角堂永機の俳諧活動―明治期編―」(『実践国文学』第80号、平成23・10)

(14) 拙稿「其角堂永機」(『江戸文学』第21号、ぺりかん社、平成11・12)